賊の一人がジラールのパンツが盛り上がっていることに気づいた。
『へへ、ここでっかくしやがって・・・お？シミができてるじゃねぇか』
「うあああ！に、握るなぁ・・！！」
パンツの布の上から強く握られ、シミが更に濃くなる。
『んじゃ、こっちも御開帳といこうか・・ひっく』
カシラがパンツに手をかけた。
「ま、待ってくれ！！！んひっ・・・やめ、やめろおおおおお」
今までにない必死の抵抗にカシラと賊らは驚き、手が止まる。
プルプルと震えるジラールを見、カシラは察し、ニヤリと笑い再びパンツに手をかけた。
『ひひっ、騎士団長サマのご立派なイチモツみせてもらおう・・・か！』
パンツを引きちぎり、ジラールのイチモツが露わになった。
途端、笑いの爆発が廃墟内に響き渡った。
『ぎゃはははは！！！』
『まじかよ、騎士団長とも野郎が・・・っぷくく』
『恥ずかしくねぇのかよ？ひゃはははは』